武蔵野日曜聖書講筵

アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ

――創世記第45～50章――

１９７７年6月5日
小池辰雄

力ある神　イスラエルの子等　ヨセフの子の祝福　選びの人　十二支族の祝福　ヤコブ葬られる　我あに神にかわらんや　神のドラマ

【創世記46】

1 イスラエル（即ちヤコブ）その己につける諸（すべて）の者とともに出（いで）たちベエルシバにいたりてその父イサクの神に犠牲をささぐ 2 神夜の異象にイスラエルにかたりて ヤコブよヤコブよといいたもう 3 ヤコブわれ此にありといいければ神いいたもう 我は神なり汝の父の神なり エジプトにくだることを懼（おそ）るるなかれ われ彼処（かしこ）にて汝を大いなる国民となさん 4 我汝と共にエジプトに下るべし亦かならず汝を導きのぼるべし ヨセフ手をなんじの目の上におかんと……

19 ヤコブの妻ラケルの子はヨセフとベニヤミンなり 20 エジプトの国にてヨセフにマナセとエフライムうまれたり 是はオンの祭司ポテパルの女アセナテが生みたる者なり……

28 ヤコブ預かじめユダをヨセフにつかわしおのれをゴセンにみちびかしむ

而して皆ゴセンの地にいたる 29 ヨセフその車を整えゴセンにのぼりて父イスラエルを迓（むか）え 之にまみえてその頸（くび）を抱き頸をかかえて久（ひさし）く啼（な）く 30 イスラエル、ヨセフにいう 汝なお生きており我汝の面（かお）を見ることをえたれば今は死ぬるも可（よ）しと…… 34 僕等は幼少より今に至るまで牧畜の人なり我儕（われら）も先祖等もともにしかりといえ しからばなんじらゴセンの地にすむことをえん 牧者は皆エジプト人の穢（けがら）わしとするものなればなり

【創世記47】

19 われらいかんぞわれらの田地とともに汝の目のまえに死に亡ぶべけんや 我等とわれらの田地を食物に易（かえ）て買いとれ 我等田地とともにパロの僕とならん また我等に種をあたえよ 然ばわれら生くるをえて死ぬるにいたらず田地も荒蕪（あるる）にいたらじ……

28 ヤコブ、エジプトの国に十七年いきながらえたり ヤコブの年歯（よわい）の日は合せて百四十七年なりき

【創世記48】

1 是等の事の後汝の父病にかかるとヨセフに告ぐる者ありければヨセフ二人の子マナセとエフライムをともないて至る 2 人ヤコブに告げて汝の子ヨセフなんじの許にきたるといいければイスラエル強て床に坐す 3 しかしてヤコブ、ヨセフにいいけるは 昔に全能の神カナンの地のルズにて我にあらわれて我を祝し 4 我にいいたまいけらく 我なんじをして多く子をえせしめ汝をふやし汝を衆多の民となさん 我この地を汝の後の子孫にあたえて永久の所有となさしめんと……

8 斯てイスラエル、ヨセフの子等を見て是等は誰なるやといいければ 9 ヨセフ父にいう 是は神の此にて我にたまいし子等なりと 父すなわちいう 請う彼らを我所につれきたれ我これを祝せんと 10 イスラエルの目は年寿のために眯て見るをえざりしがヨセフかれらをその許につれきたりければ之に接吻してこれを抱けり 11 しかしてイスラエル、ヨセフにいいけるは 我なんじの面を見るあらんとは思わざりしに視よ神なんじの子（子供）をもわれにしめしたもうと 12 ヨセフかれらをその膝の間よりいだし地に俯て拝せり 13 しかしてヨセフ、エフライムを右の手に執りてヤコブに左の手にむかわしめマナセを左の手に執りてヤコブの右の手にむかわしめ二人をみちびきてかれに就きければ 14 イスラエル右の手をのべて 季子エフライムの頭に按き左の手をのべてマナセの頭におけり マナセは長子なれども 故 にかくその手をおけるなり 15 斯してヨセフを祝していう わが父アブラハム、イサクの事えし神 わが生まれてより今日まで我をやしないたまいし神 16 我をして諸の災禍を瞶わしめたまいし天 使 ねがわくは是童子等を祝たまえ ねがわくは是等の者わが名とわが父アブラハム、イサクの名をもて称られんことを ねがわくは是等地の中に繁殖がるにいたれ 17 ヨセフ父が右の手をエフライムの頭に按けるを見てよろこばず 父の手をあげて之をエフライムの頭よりマナセの頭にうつさんとす 18 ヨセフすなわち父にいいけるは 然にあらず父よ是長子なれば右の手をその頭に按きたまえ 19 父こばみていいけるは 我知るわが子よわれしる 彼も一の民となり彼も大なる者とならん 然れどもその弟（エフライム）は彼よりも大なる者となりてその子孫は多衆の国民となるべしと…… 21 イスラエルまたヨセフにいいけるは 視よわれは死なん されど神なんじらとともにいまして汝等を先祖等の国にみちびきかえりたもうべし 22 且われ一の分をなんじの兄弟よりもおおく汝にあたう 是わが刀と弓を以てアモリ人の手より取りたる者なり

【創世記49】

3 ルベン汝はわが冢子（ルベンは長子）わが勢いわが力の始め 威光の卓越た

る者 権威の卓越たる者なり 4汝は水の沸きあがるがごとき者なれば卓越を得ざるべし 汝父の床にのぼりて汚したればなり 嗚呼彼はわが寝牀にのぼれり 5シメオン、レビは兄弟なりその剣は暴逆の器なり 6我魂よかれらの席にのぞむなかれ 我宝よかれらの集会につらなるなかれ 其は彼等その怒りにまかせて人をころしその意にまかせて牛を筋截たればなり…… 8ユダよ汝は兄弟の讃むる者なり 汝の手はなんじの敵の頸を抑えん なんじの父の子等なんじの前に鞠ん 9ユダは獅子の子の如し わが子よ汝は所掠物をさきてかえりのぼる 彼は牡獅子のごとく伏し牝獅のごとく蹲まる 誰か之をおこすことをせん 10杖ユダを離れず 法を立つる者（律法者）その足の間をはなるることなくしてシロ（その所有者なる彼）の来る時にまでおよばん 彼に諸の民したがうべし 11彼その驢馬を葡萄の樹に繋ぎその牝驢馬の子を葡萄の蔓に繋がん 又その衣を酒にあらい其服を葡萄の汁にあらうべし 12その目は酒によりて紅くその歯は乳によりて白し…… 22ヨセフは実を結ぶ樹の芽のごとし 即ち泉の傍にある実をむすぶ樹の芽のごとし その枝ついに垣を踰ゆ 23射者彼をなやまし 彼を射 かれを悪めり 24然どかれの弓はなお勁くあり彼の手の臂は力あり 是ヤコブの強き者（神様のこと）の聖手によりイスラエルの磐なる牧者の聖名により 25汝を助くる汝の父の神 なんじを祝する全能の神による 上には天の福、下にはよこたわる淵の福、乳哺の福、胎の福あらんと 26父の汝を祝することはわが父祖の祝したる所に勝りて恒久の山の限極にまでおよばん 是等の祝福はヨセフの首に帰しその兄弟と別になりたる者の頭頂に帰すべし

【創世記50】

1ヨセフ父の面に俯し之をいだきて哭き之に接吻す 2而してヨセフその僕なる医者に命じてその父に香料 医者イスラエルに香料れり 3すなわち之がために四十日を用う 其は尸に香料るにはこの日数を用うべければなりエジプト人七十日の間之がために哭けり……

5わが父我死なばカナンの地にわが掘りおきたる墓に我をほうむれといいて我を誓わしめたり 然ば請う われをして上りて父を葬らしめたまえ また帰りきたらんと…… 11その国の居人なるカナン人等アタデの禾場の哀哭を見て是はエジプト人の痛くなげくなりといえり 是によりて其処の名をアベルミツライム（エジプト人の哀哭）と称うヨルダンの外にあり……

15ヨセフの兄弟等その父の死にたるを見ていいけるは ヨセフあるいはわれらを恨むることあらん 又かならずわれらが彼になしたる諸の悪にむくゆるならんと 16すなわちヨセフにいいおくりけるは なんじの父死ぬるまえに命じて言いけらく 17汝ら斯ヨセフにいうべし 汝の兄弟汝に悪をなしたれども 冀わ

くはその罪咎をゆるせと 然ば請う 汝の父の神の僕等の咎をゆるせと ヨセフ
その言を聞いて啼泣り 18兄弟等もまた自らきたりヨセフの面の前に俯し我儕
は汝の僕とならんという 19ヨセフかれらに曰いけるは 懼るるなかれ我あに神
にかわらんや 20汝等は我を害せんとおもいたれども 神はそれを善にかわらせ
今日のごとく多くの民の生命を救うにいたらしめんとおもいたまえり……
24ヨセフその兄弟等にいいけるは 我死なん 神かならず汝等を眷顧み なんじ
らを此地よりいだしてそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓いし地にいたら
しめたまわんと 25ヨセフ 神かならず汝等をかえりみたまわん 汝らわが骨をこ
こよりたずさえのぼるべしといいてイスラエルの子孫を誓わしむ 26ヨセフ
百十歳にして死にたれば之に 香りて櫃におさめてエジプトにおけり

●力ある神

「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」と題に書きました。創世記はほとんどこの四人に関わる神の歴史と言ってもいいようなわけです。こういう偉大な先祖を持っていたイスラエル民族というのは、やはり大したものだと思います。

46章、パレスチナが大分饑饉に襲われるので、それから一つには、ヨセフがエジプトの宰相となって十分頼みになるわけですから。ヤコブ即ち別名イスラエル、これが一族郎党を率いてエジプトに移住する。出かけて往くというところです。

1イスラエル（即ちヤコブ）その己につける諸の者とともに
一族郎党と一緒に、
出たちベエルシバにいたりて
ベエルシバというのはヤコブのお父さんのイサクが住んでいた所です。
その父イサクの神に犠牲をささぐ
砂漠の民族は神様を拝するのに羊を献げるということをやったわけで、これは砂漠の宗教なものですからね。

2神夜の異象にイスラエルにかたりて ヤコブよヤコブよといいたもう
大体、呼ぶ時には二度呼ぶようなわけです。「アブラハムよ、アブラハムよ」というのは創世記22章11節のところです。
「時にエホバの使者天より彼を呼びて、アブラハムよ、アブラハムよと言えり」
まぁ二度呼ぶことが自然でしょうね。出エジプト記に入りますと、モーセが出てきますが、出エジプト記3章4節にも、
「4エホバ彼がきたり観んとするを見たもう 即ち神棘の中よりモーセよモーセ
よと彼をよびたまいければ 我ここにありというに」（出エジプト3・4）

モーセもそのように呼ばれた。そしてモーセに向かって、

「6**又いいたまいけるは 我はなんじの父の神 アブラハムの神 イサクの神 ヤコブの神なりと モーセ 神を見ることを畏れてその面(かお)を蔽(かく)せり**」（出エジプト3・6）

「我はなんじの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」

と言って現われたと書いてある。普通は

「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」

とこの三代を呼ぶ。ヨセフまでは言わないけれども、しかしヨセフは非常に重要な人物なわけです。いわゆる直系の系譜から言うと、「アブラハム、イサク、ヤコブ」、ヤコブの次はユダの方に移って行くものですから、そういう関係で「ヨセフ」と言わないのでしょうね。アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、エッサイ、ダビデ、ソロモンとこっちの方へ移っていくものですから、ヨセフはちょっと傍系みたいになる。本当は傍系ではないんだけれども。ヤコブの正妻はラケルであって、レアはお姉さんの方ですから、そっちの方に移って行くのは妙なものだ。

3**ヤコブわれ此にありといいければ**

即ち「はい」と言いました。

神いいたもう 我は神なり

「神」「エール」という字は「力ある者」という意味なんです。神様は

「力ある者」「エール」

というヘブライ語を覚えてください。即ち、

「我は力ある者なり、神なり」

と。

汝の父の神なり エジプトにくだることを懼(おそ)るるなかれ われ彼処(かしこ)にて汝を大いなる国民となさん

「汝を大いなる国民となさん」というのは、アブラハムにも、イサクにも、ヤコブにも同じように神様は臨んでくる。そして、

4**我汝と共にエジプトに下るべし亦かならず汝を導きのぼるべし**

パレスチナの地、カナンの地にまたもどしてくるぞと。

ヨセフ手をなんじの目の上におかんと

自分の子供のヨセフがやがてお前を祝福することになる。「目の上におかん」というのは、「エジプトで眠ることになるぞ」ということを間接に言っているわけです。ヤコブは今度カナンに帰って来る時はお骨になって帰ってくる。それが、「ヨセフ手をなんじの目の上におかん」ということです。そういうことをもう預言されてしまっている。けれども、

「神様は力ある神である」

ということは、「エール」ということは是非とも皆さん忘れないように。キリストは正にこの神の力を身に体した。人間の側の力は大したことない。

「われ弱き時に強し」

とパウロが言いました。人間的な弱さにむしろ絶して、弱いなんて言うのでなくて、無力で結構なんです。

「無力が無限力」

になる。神様の力を頂くと、無限の、無量の力があるから、何をやっても大丈夫です。

●イスラエルの子等

そこで、イスラエルの子等はどうなるかというと、ずっとそこに上がっているが、まぁいちいち読みませんけれども、46章8節ルベン、10節シメオン、11節レビ、12節ユダ。「何々の子は」といって、みんな一族を集めてやって来るんだからね。13節イッサカル、14節ゼブルン。こんな昔のことなんですが、よくまぁ名前を列記して書いたと思う。それから16節ガド、17節アセル、19節にヨセフとベニヤミン。ついでにそこに書いてあるでしょ、

19 **ヤコブの妻ラケルの子はヨセフとベニヤミンなり** 20 **エジプトの国にてヨセフにマナセとエフライムうまれたり 是はオンの祭司ポテパルの女アセナテが生みたる者なり**

と。「エフライム」という言葉は時々出てきます、イスラエルの別名のようにして出てくることがある。21節ベニヤミン、23節ダン、24節ナフタリ。これが十二の族、十二支族。ヤコブにはこの十二人の子供ができた。まぁ昔ですからヤコブには奥さんが二人に婢女が二人いて、その四人からこの十二人ができてしまったわけだ。今はそんなことはあり得ないことですけれども。それから28節に、

28 **ヤコブ預かじめユダをヨセフにつかわしおのれをゴセンにみちびかしむ 而して皆ゴセンの地にいたる**

「ゴセン」はカイロの東北60～70キロの所です。そこに屯（たむろ）するわけです。ゴセンの地にイスラエルの民族はエジプトに居た時には半奴隷状態で駐屯する。そういう意味でゴセンというのは大事な地名なんです。

29 **ヨセフその車を整えゴセンにのぼりて**

「のぼりて」と言うから少し高台みたいな所なんだな。

父イスラエルを迓（むか）え 之にまみえてその頸（くび）を抱き頸をかかえて久（ひさし）く啼（な）く

正直、何十年振りに会ったわけですから、お父さんに。お父さんの方では、ヨセフは死んだと思っていたんですからね。ところが、このヨセフが生きていたということを聞いて、ある意味においては確かめにやって来たわけだ。そこで「頸をかかえて久く啼く」と書いてある。非常に劇的なシーンです。

30 **イスラエル、ヨセフにいう**
即ちヤコブがヨセフに言うのに、
汝なお生ており我汝の面を見ることをえたれば今は死ぬるも可しと
もう一遍こうして会ったらいつ死んでもいいと。いかにも然らんという言葉です。即ち死んだと思った息子に会ったものだから。それからずっと書いてありますが、
34 **僕等は幼少より今に至るまで牧畜の人なり**
パロ即ちエジプトの王様に言うところの言葉です。
我儕も先祖等もともにしかりといえ
イスラエルの民は遊牧の民、牧人ですから。羊、牛等を飼っている。これが彼らの生活、牧畜業ですからね。
しからばなんじらゴセンの地にすむことをえん 牧者は皆エジプト人の穢わしとするものなればなり
エジプト人は農耕民族。ナイル河畔の広大な耕地を持っています。ところが、イスラエル人はもともと牧畜の民で、谷から谷へと、また野辺から野辺へと草を求め、また水を求めて羊を飼っていた。そういうのは少し低級だというわけだ。そこで
「穢わしとする」
なんていうわけだ。

●ヨセフの子の祝福

今度は47章。ヤコブがその子供たちと、エジプトのパロに面接することが書いてあります。まぁ大したことない。それからカナンの方の饑饉のことがずっと述べられている。それでヨセフがそういった饑饉に対しての対策、エジプトの饑饉のことも出ている。そこで自分たちは、エジプト人が饑饉で死ぬから、家畜を飼って、それにお金もないから、はじめはお金はあったんですけれども、そのお金も無くなってしまって、今度は家畜も無くなってしまって、終いには土地を食物の代りに買い取ってくれというような算段で、だんだん困ってお願いするというようなことが書いてある。たとえば19節に、
19 **われらいかんぞわれらの田地とともに汝の目のまえに死に亡ぶべけんや**
我等とわれらの田地を食物に易て買いとれ 我等田地とともにパロの僕とならん また我等に種をあたえよ 然ばわれら生くるをえて死ぬるにいたらず田地も荒蕪にいたらじ
終いには土地まで売ってしまうことになる。その後を読んでいくと、47章28節、
28 **ヤコブ、エジプトの国に十七年いきながらえたり ヤコブの年歯の日は合せて百四十七年なりき**
そこで147歳でいよいよ死ぬ時が来るというわけです。大変な長生きですけれど、今にし

てみれば。昔にしてみると大したことなかった。何百年なんていうのがいたから。そこでヤコブとヨセフとの会話が始まる。48章、

1是等の事の後汝の父病にかかるとヨセフに告ぐる者ありければヨセフ二人の子マナセとエフライムをともないて至る 2人ヤコブに告げて汝の子ヨセフなんじの許にきたるといいければイスラエル強て床に坐す 3しかしてヤコブ、ヨセフにいいけるは 昔に全能の神カナンの地のルズにて我にあらわれて我を祝し 4我にいいたまいけらく 我なんじをして多く子をえせしめ汝をふやし汝を衆多の民となさん

アブラハムにもそういうように言ったとさっき言いましたね。

我この地を汝の後の子孫にあたえて永久の所有となさしめんと

それからヤコブがヨセフの子供のマナセとエフライムを祝福することが出てくる。

8斯てイスラエル、ヨセフの子等を見て是等は誰なるやといいければ 9ヨセフ父にいう 是は神の此にて我にたまいし子等なりと

エジプトで授かった子供だと、

父すなわちいう 請う彼らを我所につれきたれ我これを祝せんと 10イスラエルの目は年寿のために眯て見るをえざりしが

かすんでしまったんだ。

ヨセフかれらをその許につれきたりければ之に接吻してこれを抱けり 11しかしてイスラエル、ヨセフにいいけるは 我なんじの面を見るあらんとは思わざりしに

お前に会おうとはつゆ思っていなかったけれども、

視よ神なんじの子（子供）をもわれにしめしたもうと

神様はお前の子供までも示して下ったと。

12ヨセフかれらをその膝の間よりいだし

祝福する時にこういうことをするんですね。

地に俯て拝せり 13しかしてヨセフ、エフライムを右の手に執りてヤコブに左の手にむかわしめマナセを左の手に執りてヤコブの右の手にむかわしめ二人をみちびきてかれに就きければ 14イスラエル右の手をのべて 季子エフライムの頭に按き左の手をのべてマナセの頭におけり

ということは、右と左というと、右の方が勝れたことになるんです。右大臣、左大臣と同じようにね。

マナセは長子なれども 故にかくその手をおけるなり 15斯してヨセフを祝していう わが父アブラハム、イサクの事え し神 わが生まれてより今日まで我をやしないたまいし神 16我をして諸の災禍を贖わしめたまいし天使

天使によって大分助けられましたからね、ヤコブは。創世記28章に、或いは32章あったように。

ねがわくは是童子等を祝たまえ ねがわくは是等の者わが名とわが父アブラハム、イサクの名をもて称られんことを ねがわくは是等地の中に繁殖がるにいたれ

これは祝福の言葉です。キリスト教ではあまり祖先のことや家系のことを言わない傾きがありますけれども、非常に家系、血筋ということを考え、またその祈りを縦の関係において祈ったり、祝福したりする。これはむしろ日本がそういう家族制度であったという、日本の本来の感覚に似ているんです、イスラエルの方は。

お父さんやお母さん、また祖先の霊をあまり重んじないような傾向がややもするとあるけれども、それはよくない。やはり、

「命日」

というようなのはよく覚えて、天界に他界した人のために祈ったりすることは大事なことです。ついでに申し上げておきます。

私なんかも、母や兄の命日は忘れようとしても忘れられません。そういって祝福した。

17 **ヨセフ父が右の手をエフライムの頭に按けるを見てよろこばず 父の手をあげて之をエフライムの頭よりマナセの頭にうつさんとす**

長子と季子と逆ですよと、お父さんに言おうとした。

18 **ヨセフすなわち父にいいけるは 然にあらず父よ是長子なれば右の手をその頭に按きたまえ** 19 **父こばみていいけるは 我知るわが子よわれしる 彼も一の民となり彼も大なる者とならん 然れどもその弟（エフライム）は彼よりも大なる者となりてその子孫は多衆の国民となるべしと**

弟の方を祝福した。これはヤコブ自身がエサウとヤコブと兄弟だったでしょ。ヤコブは弟だった。その弟であったヤコブは、エサウ、兄さんよりも神様に祝福された。同じようにヨセフの子も

「弟の方が実は大事なんだ」

と。そういうことを自分の経験からも、もちろん示しとして示されたわけです。

●選びの人

人間の選びというものは、予定説というのがある。カルビンの予定説というのは有名ですが、これはもともと聖書の中にあるんです。

「われ憐れまんとする者を憐れみ、頑なにせんとする者を頑なにする」

なんて躓きになるような言葉、これはパウロが旧約のこの言葉を引用している。予定説というのは難しいので、今日はお話しはしません。けれども、客観的に、

「あの人は選ばれて、こっちは選ばれていない」と言うことはできない。だから、予定説というのは説明するのに難しい。けれども、選ばれないからといって、究極的にいってその人は捨てられてしまうかは、これは別問題です。

「選ばれた人は選ばれない人を救うところの使命」を帯びているんです。選ばれたからよしというのではない。福音の世界に入ったということは、他の人をまた救う使命を帯びている。神様に救われて、

「自分はクリスチャンになった」と言っていい気になって、他の人を助けたり、救うことをしなかったら、どっこいこれは天国に往きそこなってしまう。

だから、救われたということは、

「人を救う使命と義務とをむしろ負わされている」ということです。そこは間違えないように。救われた人はみな本質的に伝道者なんです。何も講壇でしゃべることが伝道ばっかりではない。愛の行為をもって、どういうことをもってか、それは知らん。あるいは生命を人のために犠牲にすることがあるかも知れない、この伝道の使命を帯びて。話がちょっとズレましたが、大事なことですので。

ヤコブが選ばれた。しかし、その選ばれたのは、ヤコブを通してたくさんの救いが出てくる。ヨセフも正に選ばれたる人です。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、これみんな選びの人です。これらを通して多数の国民となるというのは、それを基として多くの人が救われていくということですね。ただ数が多くなるというような、そんなことではない。万民救済を本当の悲願とするわけです。

ただ人を見ているとね、

「この人はすぐ救いに入れそうな人だ、あの人はちょっとやっかいだな」ということはだんだん経験するとわかる。また、よさそうに思ったのが、どっこい背いたりね、難しいものですよ、なかなか人間というものは。

「父こばみていいけるは 我知るわが子よわれしる彼も一の民となり」

48章19節。ちょっと面白いところですが。もちろん、マナセも大きな民とするけれども、エフライムは更に大きな使命を負うことになる。まぁ、そういうことがあったということです。

21 **イスラエルまたヨセフにいいけるは 視よわれは死なん**
もういよいよ私は死ぬぞと。
されど神なんじらとともにいまして汝等を先祖等の国にみちびきかえりたもうべし
「神なんじらとともに」というのは旧約ではよく出てきます。
22 **且われ一の分をなんじの兄弟よりもおおく汝にあたう是わが刀と弓を以て**

アモリ人の手より取りたる者なり

そういうものを遺品として与えると言うんだな。イスラエル即ちヤコブは生きては帰らない。死して帰るということになった。

●十二支族の祝福

そこでヤコブはあの十二支族を祝福することになる。それは49章、

3**ルベン汝はわが冢子（ルベンは長子）わが勢いわが力の始め　威光の卓越たる者　権威の卓越たる者なり**

長男だから。

まぁ私の兄貴〔政美〕は長男でしたが、正にこのような勇ましい兄貴でした。まぁどの点から見ても私より上ですよ。

汝は水の沸きあがるがごとき者なれば卓越を得ざるべし

妙なことを言っているね。この場合の「水が沸き上がる」というのは、水が動くことをいうので、そして動揺性があるという。そのために長子としてのすぐれたものであるけれども、最後までそうはいかんということを言っているらしい。ここで、

汝父の床にのぼりて涜したればなり　嗚呼彼はわが寝牀にのぼれり

というのは、ビルハと悪いことをしたことがあるということです。

5**シメオン、レビは兄弟なりその剣は暴逆の器なり**　6**我魂よかれらの席にのぞむなかれ　我宝よかれらの集会につらなるなかれ　其は彼等その怒りにまかせて人をころしその意にまかせて牛を筋截たればなり**

まぁこれ、いちいち解釈していると時間が無くなってしまうからやめますけれども、大事なところだけにします。

8**ユダよ**

ここが大事なところです。ユダはさっき言った正統直系になるわけです。テラ、アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、それからずっと来てエッサイ、ダビデ、ソロモン、キリストのお父さんのヨセフまで来るわけです。ヨセフは肉のお父さんではないですけれども。

汝は兄弟の讃むる者なり　汝の手はなんじの敵の頸を抑えん　なんじの父の子等なんじの前に鞠ん

「ユーダー」というのは実は

「讃える、讃美する」

という動詞からきた名詞ですよ。「讃美」という意味です。ダビデ王の時にそのようなことになった。

9**ユダは獅子の子の如し　わが子よ汝は所掠物をさきてかえりのぼる**

余程イスラエルの、あの辺の曠野には獅子がいたと見えるね、よく獅子が出てくる。

彼は牡獅子のごとく伏し牝獅のごとく蹲まる

敵をねらっているわけだ。

誰か之をおこすことをせん 10**杖ユダを離れず**

「杖」というのは権威の象徴です。王権の象徴。

法を立つる者（律法者）その足の間をはなることなくしてシロ（その所有者なる彼）の来る時にまでおよばん

まぁ歴史的にどういうことに当てはまるかと、いろいろ説がありますけれども。

彼に諸の民したがうべし 11**彼その驢馬を葡萄の樹に繋ぎその牝驢馬の子を葡萄の蔓に繋がん 又その衣を酒にあらい其服を葡萄の汁にあらうべし**

葡萄の汁というのは血に通うんです。この辺は大分キリストの預言みたいな言葉だね。

12**その目は酒によりて紅くその歯は乳によりて白し**

妙なことが書いてある。ユダというのは非常に王権を持つようなことになる大事な支族だと。ユダヤというのはユダという名前と同時に、支族全体を縦の関係で言っているわけです。それから、13節にゼブルン、14節イッサカル、16節ダン、19節ガド、ナフタリ。ナフタリというのはガラリヤ湖畔に近い所です。それからヨセフ。

22**ヨセフは実を結ぶ樹の芽のごとし 即ち泉の傍にある実をむすぶ樹の芽のごとし**

詩篇の1篇にありましたね、「泉のかたわらの樹は栄える」ということが。だから、それが約束されている。栄光がね。

その枝ついに垣を踰ゆ

枝というのは子々孫々。

23**射者彼をなやまし 彼を射 かれを悪めり** 24**然どかれの弓はなお勁くあり彼の手の臂は力あり 是ヤコブの強き者（神様のこと）の聖手によりイスラエルの磐なる牧者の聖名により**

「イスラエルの磐なる牧者の聖名により」

というのはなかなか強い言葉だね。イスラエルの磐なる牧者。神様のことを「磐」と言ったり、「牧者」と言ったりしますから。

25**汝を助くる汝の父の神 なんじを祝する全能の神による**

だから、ヨセフは非常に神様の力によって、聖名によって祝福された種族であるということになる。

上には天の福、下にはよこたわる淵の福、乳哺の福、胎の福あらんと

大変なことだ。ヨセフはこのようにして兄弟も救ったし、本当の親孝行もしたし、大変な祝福を受けるわけだ。

26**父の汝を祝することはわが父祖の祝したる所に勝りて恒久の山の限極にま**

でおよばん 是等の祝福はヨセフの首に帰しその兄弟と別になりたる者の頭頂に帰すべし

葡萄だとか、乳、牧畜、まぁいろいろな意味において栄えて行くと。だから、ヨセフのところと、さっきのユダのところ。ユダは権勢の方、ヨセフは恵みの方だね。

「恵みと信実」

と言うけれども、むしろ恵みの面が非常にこのヨセフには現われている、祝福がね。

27節ベニヤミン、それでお終い。全部ヤコブがそのように祝福する。また果たして、ヤコブがこれだけのことを言ったかは、学問上は問題がありますけれども、大体の傾向においてこういうようにして祝福したということは、原形はあったと思います。

それからヤコブが死ぬ時に墓場がどうだなんていうことが書いてあります。そんなことはいいです。

●ヤコブ葬られる

それから50章、いよいよヤコブが葬られるところ。

1ヨセフ父の面に俯し之をいだきて哭き之に接吻す

いよいよお父さんが臨終にあるもんだからね。そして、

2而してヨセフその僕なる医者に命じてその父に 香 らしむ 医者イスラエルに 香 れり

死体が腐らないようにでしょう。薬をぬって保存して、よく乾かしておいて、よくミイラになるわけです。エジプトにはそういったミイラがよくあるんだな。

3すなわち之がために四十日を用う 其は尸に 香 るにはこの日数を用うべければなり

大変なもんだな。

エジプト人七十日の間之がために哭けり

まぁ昔の人はそういうところがあるんだね。

5わが父我死なばカナンの地にわが掘りおきたる墓に我をほうむれといいて我を誓わしめたり

ちゃんともう墓所ができているということだ。

然ば請うわれをして上りて父を葬らしめたまえ また帰りきたらんと

そこで帰らしてくださいとパロに言って、パロがよろしいというわけで、しかも大いに見送ってくれるわけです。ずいぶん丁寧なことだよ。たとえば11節、

11その国の居人なるカナン人等アタデの禾場の哀哭を見て是はエジプト人の痛くなげくなりといえり 是によりて其処の名をアベルミツライム（エジプト人の哀哭）と称うヨルダンの外にあり

エジプト人のことを「ミツライム」といいます。「アベル」は「哀哭（なげき）」。そんなことがあった。まぁずっとやって来たんだからね。

●我あに神にかわらんや

それから最後のところ、15節から、これは大事なところです。

15 **ヨセフの兄弟等その父の死にたるを見ていいけるは ヨセフあるいはわれらを恨むることあらん 又かならずわれらが彼になしたる諸の悪にむくゆるならんと**

即ちイスラエル人というのは「報復観念」が強いですからね。ドイツ語で「フェァゲルトゥングスゲダンケ」(Vergeltungsgedanke) という。「フェァゲルトゥング」(Vergeltung 報復) というのは、

「目には目、歯には歯を。死には死、生命には生命を。傷には傷を」

人を殺したら必ずその人は死刑に処せられる。死をもってこれに応えなくてはいかんと。殺人をすれば殺されるということです。だから、

「おれたちはヨセフに悪いことをしたから、今度はやっつけられるぞ」

と。諸の悪に報いが来ると。

16 **すなわちヨセフにいいおくりけるは なんじの父死ぬるまえに命じて言いけらく** 17 **汝ら斯ヨセフにいうべし 汝の兄弟汝に悪をなしたれども 冀（こいねが）わくはその罪咎（つみとが）をゆるせと**

みんな寄ってたかって末っ子のヨセフを穴に入れてしまって、そして猛獣に食わせてしまおうなんて。ところが、これが穴から出されて、エジプトに行く隊商に売られてしまった。長男のルベンは末っ子をかばってやった。とにかく、他の兄弟はヨセフを殺そうとするまでに悪いことをしたから。まぁゆるしてやってくれと、お父さんが死ぬ前に遺言しているわけです。

然ば請う 汝の父の神の僕等の咎（とが）をゆるせと ヨセフその言を聞いて啼泣（なけ）り

お父さんからそういうことを言われたということを聞いて泣いた。ヨセフはお父さんからそう言われなくても、もう既に兄弟をゆるしていますからね。

「お前たちは私をこうやったけれども、実は神様がしたんだ」

と。

「神なり」

という有名な言葉。兄弟が、あなた方が私をエジプトに遣わしたのではない。それは本当はその背後に神様の手があったんだ。やったことは悪いけれども、神様はそんな悪事を通しても神様の手が動いていたんだと。

「人生のいろいろな出来事にぶつかっても、その究極の意味は神によるんだ」

ということを、あのヨセフの言葉が現わしている大事な言葉です。「神なり」という。

18 **兄弟等もまた自らきたりヨセフの面(かお)の前に俯(ふ)し我儕(われら)は汝の僕とならんという**

一番末っ子のヨセフに向かって、兄さんたちが「私たちはお前の奴隷となる」と。

19 **ヨセフかれらに曰いけるは懼(おそ)るるなかれ我あに神にかわらんや**

「我あに神にかわらんや」

と。大事な言葉です。

「神様の代りを私がしましょうか、神様に代ってお前たちを審くようなことをするか」

と。罪に対する罰をもって応えることはしないと。

審きは神にある。ゆるしもまた神にある。だから、ヨセフが彼らをゆるしたというあのところも、ヨセフのただ人間的なゆるしではない。ヨセフが彼らをゆるしたというそのゆるしの心は、やはり神から来ている。これがなかなか出来ないんです。神の憐れみは、

「敵をもゆるせ」

と。キリストが、

「彼らは成すところ知らず、ゆるし給え」

と言った。十字架上で、

「十字架につけた悪い奴らをゆるしてやってください」

と。自分は死ぬんですよ、それは神のアガペーという愛の心ですから。そういうゆるしに遇ったら、これはもう、ゆるされた方はぶっ倒れてしまう。ぶっ倒れて本当に回心を起こす。心を改める、

「私は本当に悪かった」

と。キリストを迫害していたパウロがひっくり返されたのもそうです。ゆるしの背後にはみな「愛の力」がある。力にはいろんな力があるけれども、力強い力は愛の力です。

人を救う力、一切のものを担い上げてしまう力、これは神から来る。人間にはない。だから、この力ある神にとらえられると、神様はその人を通して、無力なる者を通して、そういう相手を救い上げる力を現わす。

相手を倒す英雄的な力は必ず滅びます。ナポレオンもヒットラーもみんな滅びた。全ヨーロッパを席巻するような力を、武力を持っていたが、その武力は、剣は剣によって倒れる。

19 **ヨセフかれらに曰いけるは懼(おそ)るるなかれ我あに神にかわらんや** 20 **汝等は我を害せんとおもいたれども神はそれを善(よき)にかわらせ**

神様は審こうと思えば審くんだけれども、審きをやめてゆるしに変えて、善にかわらせ、

今日のごとく多くの民の生命を救うにいたらしめんとおもいたまえり

はい、ここに「救う」という言葉が出てきたでしょ。一切は救いのためです。もうこの心境に入ったら何も問題は無くなる。もう人間の毀誉褒貶(きよほうへん)なんていうのは問題でなくなる。

誉められたり、貶されたり、何と思われても一向差支えない。そんなことでもってどうのこうのと、動かなくなってしまう。

もう一つの奥の世界だから、次元が違うんです。そういう神の心は、もう絶対次元の世界ですから。我々はキリストの十字架で、そのようにして自我という我執から完全に救われているから、相変わらずダメであっても、そんなことはもはや問題ではない。「ダメでないもの」がその後から物凄い力をもって我々の中に入ってくる。これが聖霊の世界、

「聖霊の愛」

というのはそのことです。

50章の今の数節のところと、45節の特に8節ですけれども、これが相呼応してヨセフの神的な愛の心が現われているところです。人間が同じ次元にいたらそういう心は出てこない。次元が高くならないと。絶対次元、あるいはもう一つどん底に立たないと。人の思惑だとか、人のやることに対して、同じ次元でもってどうのこうの思っているうちはいつまで経っても始まらない。いいですね。

24 **ヨセフその兄弟等にいいけるは 我死なん**
ヨセフもいよいよ死ぬ時がやって来た。
神かならず汝等を眷顧み なんじらを此地よりいだしてそのアブラハム、イサク、ヤコブに誓いし地にいたらしめたまわんと
そう言った、末っ子のヨセフが。
25 **ヨセフ 神かならず汝等をかえりみたまわん 汝らわが骨をここよりたずさえのぼるべしといいてイスラエルの子孫を誓わしむ** 26 **ヨセフ百十歳にして死にたれば之に 劓りて櫃におさめてエジプトにおけり**
ヨセフは110歳だから、そう長生きはしなかった。非常に苦労したからね、ひとつは。

●神のドラマ

これで一応お粗末ながら、創世記を終ったわけです。創世記は必ずまた読み返して、何回読んでも大事なところです。

それで、アブラハムは信仰の祖です。キリストは「アブラハムの子」と言われる。アブラハムの裔、もちろんアブラハム以上です。

「われはアブラハムより先にありしなり」

とキリストは言った。天界にキリストはアブラハムより先に、神様と永遠の世界にいたんですから。

イサク、これは従順です。

「幸福なるかな心の柔和なる者、その人は地を嗣がん」

とキリストの言葉があるでしょ。あの「柔和」という字が「従順」と同じなんです。

ヤコブは霊的な戦い、戦闘的です、ヤコブという魂は。非常にドラマティックな生涯を送っている。

ヨセフは愛。

イサクはあまり目立たないけれども、非常に従順な、

「十字架の死に至るまで従い給えり」

というキリストのあの従順です。

ヤコブ、これはサタンとの戦い。

「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」というのは、

「信仰・従順・霊戦・愛」

の象徴みたいだな。パウロが

「信・望・愛」

と言ったけれども、望は別にここにないけれども、信と愛がここにちゃんとある。それで「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」というこの人物の実存をこのようにして掘り下げていくというと、また面白いと思います。

何と言ってもヨセフが愛の象徴として、キリストの予表みたいだ。なかなかいろいろな才能も豊かでしたけれども、これだけの態度を本当にとれるということは、神霊が内住していたような人でしたね。それでなければエジプトにおけるあれだけの業もできなかったろうし、またそのような本当のゆるしと助けの愛の行為もできなかったろう。即ち神の力が愛として現われた。

ヤコブはサタンとの戦い、戦闘的な方に現われた。

イサクは神の力に、これただ無私の境地で従って行った。

アブラハムは神を信じ抜いた。

「何処に往くかを知らずして出でゆけり」

と、聖意体現です。まぁ、新約ほどのはっきりとしたあれではありませんけれども。旧約の人間的ないろんな躓きや失敗をやっています、どれも。だけれども、そんなことを見ているのではない。中心になっている大事な精神を見る。

「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」

というけれども、問題は人間ではない。これらの人物を通して神様はどのようにイスラエルの歴史を展開して、大きな救いのドラマを――大事な最初の第一幕といいますかね――それを展開されたか。

「神のドラマ」

としての神の御意と力の動き、それを見ることを土台としなければいかん。人間の実存そのものを問題にしたって大したことない。いいですね。それで、創世記を終るとします。